
白金の錬金術師 姫君の里帰り

チルノ・トレバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白金の錬金術師 姫君の里帰り

【Nコード】

N8306Z

【作者名】

チルノ・トレバー

【あらすじ】

のんびりと、軍の高官として転生生活を送っていた私は、いきなり神の世界に呼び出される。そして私は、神の力で元の世界に黄泉帰る事に・・・ 作者は京都出身ではありません。その為、主人公の口調に違和感があるかもしれません。後、この小説には原作崩壊や独自設定が含まれます。ご注意ください。

え？黄泉帰り？（前書き）

どうも皆さんは初めまして、チルノ・トレバーです。

拙い文ですが、頑張っていくのでよろしく願います。

え？黄泉帰り？

目が覚めると、神の世界に居た。

・・・あれ？私、死んでないよね？

普通に寝てたよね？どういふ事？

「おお、目が覚めたか！」

私が状況を飲み込めずに、混乱していると、聞いた事が有る声が聞こえて来る。

「・・・ゼウス、何で私が神の世界（こゝろ）に居るか教えてくれない？」

私は、普通に寝ていた私が、何故ここに居るかをゼウスに聞く。

「なに、今回はお主にサプライズをな！」

「サプライズ？」

「お前さん、寝る前に『元の世界に戻りたい』と言っていたらどう？その願いを叶えてやるっ！」

「・・・はい？」

この神様は今何て言ったの？

「だから、お前を元の世界に戻してやるっと言ったのだ！」

「いやいや・・・言ってる事は、分かってるから。そうじゃなくて、なんでいきなりそんな事になったの？」

「いや・・・な。お前さんは、我輩がやらかしたせいで、死んでしまったからな。お前さんの望む事は、出来るだけ叶えてやりたいのだ」

「ゼウス・・・」

どうやら私は、今まで勘違いをしていたみたいだ。

ゼウスが、こんなに私の事を想ってくれるなんて・・・

「ただ・・・いくらか問題が有ってな」

「・・・え？」

「いくら吾輩でも、同じ時間軸に送る事は出来んだ」

・・・まあ、別に同じ時間軸に送れないのは、しょうがないか。

「どれ位ずれるの？」

「最低でも、十年はずれるだろうなあ・・・」

「はああ!?!」

ずれ過ぎでしょ!?!?

「それに、一時的とはいえ、死んだ人間を同じ世界に生き返らせるからな。世界に異常が発生するかもしれん。滞在出来る期間は、二週間程度だと思ってくれ」

二週間って・・・短いなあ。

・・・って、あれ？

「私が今居る世界の私の存在はどうなるの？」

私が居なくなったら、この世界は無くなっちゃうんじゃない・・・

「安心するがよい！お前さんが、元の世界に戻っている時間は、いくらあの世界に居ても経つ時間は、五時間程度だ！この世界は消える事は無い！」

「そうなんだ・・・でも、死人が生き返ったら、大きな騒ぎになるんじゃない？」

花開院家に妖怪扱いされた拳句、滅されるなんて、シャレにならないしね。

「記憶を多少弄って、旅に出ていた事にすれば、問題は無い。しかし！間違っても、家族に会ってはいかん！」

「どうして？」

「記憶操作は、家族には効果が無いのだ。もし、いきなり自分の娘が生き返ったらどう思う？」

「・・・分かった。家族には会わない様にする。でも、他の人には会っても良いんだよね？」

「ああ、それは問題無いぞ」

「じゃあ、地の口調に戻した方が良いよね」

私は、軽く咳払いをして、口調を変える。

「ねえゼウス、ちょいお願いが有るんや。聞いてくれへん？」

「！」

いきなつて口調が変わつたうちに、ゼウスは驚いていとるみたいや。

まあ、当然やね。

うちがこの口調でしゃべるのは、初めてさかいに。

「・・・願ひ事とは？」

「うちの姿を、生前の姿に戻せへん？」

「生前の姿にか？」

「そやよ。流石に今の姿やと、違和感有ると思つさかい。後、特典の魔法とか羽とかも外して欲しいんや。必要あらへんさかいね」

「身体能力や、錬金術はどうする？」

「元々、特典無しやおんなじ位の身体能力は有ったさかい問題あらへんよ。錬金術についても、必要無いから預かって」

「しかし、本当にいいのか？何か有ったら・・・」

「問題あらへんよ。うちにはこれが有るさかい」

そない言うて、うちは札を取り出す。

「うちは陰陽術を使えるさかい、問題があらへんよ。伊達に、花開院家当主直々におせて貰ってへんさかいね」

「せめて武器は持って行け！」

「それも、問題あらへんよ。戦う事になっても、陰陽術で十分やし、それに武器は有るさかいね」

「どこにだ？持っておらんではないか？」

「まあ見ててよ。・・・言形造形ことかたぞうけい『三日月宗近』」

うちが片手で印を結びもって術を読むと、うつくし日本刀が手元に現れた。

「どない？他かて生み出せるよ？」

「いや・・・十分だ。そろそろ飛ばすが良いか？」

「ああ、そや。元の世界行ってる間は細川扇奈って名乗ってもええ？」

「ああ、構わんぞ。・・・では、飛ばすぞ！」

ゼウスがそない言わはった瞬間、目の前が真っ暗になる。

「楽しんでこい！」

その言葉を終いに、うちは意識を手放どした。

え？黄泉帰り？（後書き）

どうでしたか？

次は主人公設定です。更新をお待ちください。

それでは。

主人公紹介（前書き）

今回は主人公設定です。

独自設定が有ります。

誤字、脱字が有るかもしれません。ご注意ください。

それではどうぞ。

主人公紹介

主人公設定

ほそかわせんな
細川扇奈

今作の主人公。元細川家当主跡取り。

CV白石涼子

年齢は25歳程度。

所在地

無し。（既に彼女は死んでいるため）

容姿

身長は158cm程であり、髪は黒色で膝辺りまで有る超ロングのストレート。

バストは88cm有る。

服装は和服を着ており、その上に細川家の家紋が入った羽織りを羽織っている。

性格

温厚だが飄々としている。

戦闘中も冗談を言いながら戦う。

口調

京都弁で話す。

武器

特殊な素材で出来た鉄扇『黒夢』、無数の札、液体の入った鉄製の筒を所持している。

戦闘方法

鉄扇術と、細川流陰陽術を駆使して戦う。

細川流陰陽術は、花開院流陰陽術を扇奈本人が独自に改良した物で、花開院流陰陽術を大きく上回る術が多数存在するが、非常に習得が難しく、現在の所使えるのは扇奈本人と、彼女の使役する式神のみである。

備考

幼い頃から素晴らしい才能を発揮し、僅か5歳で次期当主となる事が確定する。

その後も才能を発揮し続け、細川家誕生以来の天才と呼ばれる。

20歳頃には、花開院家と共同、或いは単独で妖怪相手に戦い、妖怪からは「夜桜姫」と恐れられ、花開院家などからは「細川の姫君」

と信頼された。(と言っても、妖怪への態度は馴れ馴れしいほどに好意的で、実際細川本家には妖怪が結構な数居た。)

しかし、その高過ぎる才能故に、危険視した羽衣狐によって死の呪いを掛けられてしまう。

その五年後に、扇奈は一度目の生を終える。(羽衣狐の掛けた呪いは、十年後に亡くなるという物だったが、神が間違っただけで扇奈を殺してしまっただけで、呪いの効果は消滅した。)

二度目の生は、鋼の錬金術師の世界で、名前をマリア・コマンチと変え、国軍中將としての生活を送っていた。

ある時に神に呼び出され、神「元の世界に戻してやる」と言われる。

扇奈は、貰った特典を全て神に返し、元の世界に向かい物語が始まる。

主人公紹介（後書き）

どうでしたか？

次は物語に入ります。更新をお待ちください。

それでは。

京都に帰って来ました！（前書き）

いよいよ京都帰ってきました。

変な所や、誤字、脱字が有るかもしれません。ご注意ください。

それではどうぞ。

京都に帰って来ました！

皆はんおはようさん、細川扇奈や。

今、ゼウスの力で京都に帰ってきた所や。

まあ、あれやねえ・・・凄いい懐かしいねえ。

この空気とええ、この風景とええ・・・十年前と殆ど変われへんな。
せつかく帰ってきたんやし、観光しよけかいな？

・・・って、あれ？お金貰ったつけ？

袖の中に入れてればええんやけど・・・

「(ゴソゴソ・・・)うん・・・これかいな？」

適当に探つとると、それっぽい感触を感じたさかい取り出してみる。

「おゝこれや、これや！・・・あれ？紙が挟まってる・・・」

挟まってる紙を取って開いてみると、そらゼウスがうち宛に書かれた手紙やった。

「え〜と？なににな・・・」

『吾輩の力で、財布の中身を全て一万円に変えておいたぞ！後、お

前さんがその世界に居る間は、決して無くなる事は無いからどんどん使っが良い！」

ゼウス・・・あんさんは・・・！

うちは今、猛烈に感動したはるよ！！

いぬ時に、何やお土産持って行かへんと！

・・・まあ、そら置いといて。

ゆっくり観光しはりますかな。

「となれば、移動手段やね。式神変化『うみかたのへんげ檳榔廂車』 っと」

ボンッ！

うちが一枚の札を投げ、片手で印をくくると札が爆発し、檳榔廂車が現れた。

「ほなお願いね」

うちは檳榔廂車に乗り込み、名所巡りに向かう・・・

数分後 檳榔廂車内

「やっぱり乗りモンの中で、檳榔廂車が一番乗り心地がええなあ」

こうやって、そろっと牛はんが引く檳榔廂車に乗って、目的地に向

かう・・・趣が有るやる？

この檳榔廂車は、一般人には絶対見えへんし、いらう事もでけへんさかい、凄い安全なんや。

それに・・・

「うち好みの和お菓子や、お神酒も有るさかい、目的地に着くまでくつろげるしね」

うちはそない言いもってお神酒を盃に注ぎ口に運ぶ。

「(クイツ)・・・ふう、やっぱり美味しいなあ。と言つても、呑み過ぎには気を付けへんとあかんやけどね」

よう直ぐ鹿金寺に着くんさかいに、酔いどれ状態で観光なんてどしたくへんし。

ブモオ〜

「どないやら、到着どしたみたいやねえ」

うちは牛はんの鳴き声を聞き、檳榔廂車を降りる。

目の前には金色に輝く鹿金お寺が建つとった。

「やっぱり鹿金寺は綺麗やなあ。なん度見ても飽きないわ」

そない言いもって、うちは鹿金寺の周辺を見ていく。

「・・・？なんや、これ？」

うちは偶然違和感を感じ、ちびつと調べてみる。

「花開院流の結界術・・・それもばんばん強力なモンやね。・・・
なんで鹿金寺に、結界なんて貼ってるんや？」

多分、何やの意味が有ると思うんやけど・・・

「それに・・・京都の周辺に、妖気が渦巻いとる」

なんやろうなあ、モン凄いやばい感じがしはるなあ。

「しょうがない、観光はやめやな。・・・念の為に、式神を放つて
おい」

うちは、一枚の札を取り出し、ほる。

「さて・・・式神変化『天狼』」

ボンッ！

札が爆発し、煙が晴れへんと、銀色の毛並みの巨大な狼が現れた。

「天狼、久し振りやねえ（ナデナデ・・・）」

グルル・・・

うちが撫でてあげると、嬉しそないにのぞを鳴らす。

「天狼、あんさんにはこの鹿金寺を、護って欲しいんや。もし、妖怪が此処に攻め込んだんやりしてきたら、撃退してもらおいやしたいんや。頼めるかいな？」

ガウツ！！

どないやら、承諾してくれたみたいや。

「頼むな。ほな！」

天狼に別れを告げ、うちは何や知っとるであろう花開院の陰陽師に会う為に、花開院本家に向かう。

数十分後 花開院本家付近

扇奈姫が本家に向かっていている時、花開院家の陰陽師である花開院ゆらは、浮世絵町の友人達と共に花開院本家に向かっていた。

「もう少しで本家に着くぞ」

「妖怪退治を生業とする、陰陽師の総本山・・・どんな所なんだろうな!？」

「楽しみっスね！」

「そう言えば、何で奴良と及川さんは来れなかったの？」

「家の事情だつて」

「リクオ君や、及川さんと一緒に来たかったなあ」

「……（若が、遠野で修行してるなんて言えねえしなあ……）」
「ブワッ！」

ゆらが友人達と話しながら歩いていると、突然突風が吹き荒れる。

「風も無いのに突風……妖怪の仕業か!？」

「風の悪戯ツスね」

「こつち見んな、島！」

「目にゴミが……」

「何だったのかしら？」

「全く、災難だぜ……」

各自別々の反応をする中、ゆらには別の物が見えていた。

「今のは……牛車？」

ゆらは、この後直ぐに牛車に乗っていた人物に会う事になる。

同時刻 檳榔廂車

ん？今、靈力を感じたような……

まあ、ええか。

そろそろ着くかいな？

とかおもてたんやけど・・・

「何者だ！此処が、花開院本家と知つての事か！」

いきなつて花開院家の陰陽師に、檳榔廂車が囲まれた。

「立ち去れ！立ち去らねば実力で排除する！！」

・・・何や、壮絶に勘違いされてるなあ。

まるで人を悪人みたいに・・・失礼やわあ。

「あんさん達・・・お客はんにそら失礼ではおまへんの？」

うちは、檳榔廂車の眉を上げ、顔を見して抗議しはる。

「あの服装に京都弁、何処かで・・・」

「義秀、いきなり高圧的な口調で脅すのはよすんだ！」

「侵入者には変わらん！名を名乗れ！」

「細川扇奈や。それとも・・・細川の姫の方がええ？」

うちが名乗った瞬間、陰陽師達に動揺が走る。

「細川の姫君？ふん、知らんな！何処の馬の骨とも知れん輩を通すと思うのか？そのような事を口にするとは、どうやら帰る気が無いと見える・・・言葉通り排除する！」

しかし、うちの事を知らんのか、一人の若い陰陽師が、うちに向かって飛び掛ってくる。

血気盛んちゅうか・・・身の程知らずちゅうか・・・若いねえ。

しょうがへん・・・ちよい、お灸を据えてあげまつしゃるか。

花開院分家「八十流」の三男である花開院義秀は、突如現れた牛車に乗っている人物を排除しようと牛車に飛び掛った。

「よすんだ義秀！その御方は・・・」

牛車に乗っている人物の正体に気付いた他の陰陽師が、義秀を止めようとすも、最早手遅れであった。

「我が妖刀「鬼喰い」を食らえ！」

義秀は、自分で製作した妖刀を鞘から抜き放ち、牛車の乗っている人物を切り付けた。

だがしかし・・・

ガギイイイン！！

「何!？」

その刃は、巨大な鉄扇に防がれ、届く事は無かった。

「ええ刀やね。材質、切れ味共に問題あらへん。せやかて・・・この程度で、この「黒夢」には傷一つ付けられへんよ?」

切り付けられた人物・・・細川扇奈姫は、穏やかに笑いながら言う。

「さて・・・今度は、こつちの番やね」

「ちい!!!」

義秀は、扇奈姫が攻撃しようとするのを感じ取り、直ぐ様後ろに飛ぶ。

「逃がさないわっと。肉体変化『妖狐の尾』」

シユルシユル・・・

扇奈姫の言葉と同時に、九本の尾が現れ、義秀に襲い掛かった。

ドガガガッ!!

「ぐわあああつ!!」

九本の尾の連撃をまともに受けた義秀は、意識を失い地面に叩きつけられた。

あかん・・・やり過ぎた。

ここまでやるつもりは無かったのに・・・

どないしょ・・・

「姫様」

うちがどないしょかと思えとると、懐かしい声が聞こえてきた。

「おゝ貞平はんお久しぶりやねえ」

声を掛けてきたのは、花開院分家「京釜流」の陰陽師の花開院貞平はんやった。

「後は、儂にお任せ下され。・・・貴様ら！何をしておる！義秀を連れてさっさと散らんか！！」

「・・・は、はっ！」「」

貞平はんの怒号に、他の陰陽師達は慌てて散らばっていった。

「相変わらず凄い迫力やねえ」

「ハハハ・・・さあ、本家に案内致しましょう」

「ちよい待って、今降りるさかい・・・ええしよつと」

スタツ

「檳榔廂車、ようええよ。おおきにね」

モオオ

ボンツ！

うちの言葉に反応して、檳榔廂車は札に戻りうちの手元に戻る。

「さあ、行きまひよか」

「・・・姫様、尻尾は消さないのですかな？」

「えゝ別にええではおまへんの」

「妖狐と間違われても知りませんか？」

「多分でもないでしょ。さあ、行きまひよ」

うちは貞平はん共に花開院おもやの中に入っていく・・・

京都に帰って来ました！（後書き）

オリジナル言語、陰陽術説明

檳榔廂車 びろっひさしのくるま

細川扇奈の使用する式神の一つ。

牛車を式神に使う陰陽師は、他にも存在するが、檳榔廂車を使用するのは彼女のみである。

基本的に移動手段として使用され、移動速度も様々である。

天狼 てんろう

細川扇奈の使用する式神の一つ。

巨大な銀狼の姿をしている。

扇奈に対する忠誠心が非常に高く、扇奈の敵となる者には容赦なく死を与える。

妖狐の尾 ようこのお

細川流陰陽術の一つ。

白金色の九本の尾を生やす。

基本的に戦闘に使ったり、気分で生やしてみたりする。

又、九本の尾は自由自在に使え、物を持ったりすることも出来る。

黒夢　くろゆめ

細川扇奈の持っている鉄扇。

非常に硬く、仕込まれた刃も大業物に引けを取らない。

それだけではなく、鉄扇の大きさを自由に変える事も出来る。

京釜流　けいぶりゅう

花開院分家の一つ。

主に、肉体強化の術を得意とする。

戦闘の際には、肉体を強化し、己の拳のみで妖怪に立ち向かう。

その為、京釜流の陰陽師は、己の肉体に自信を持つ者が多い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8306z/>

白金の錬金術師 姫君の里帰り

2011年12月29日12時45分発行